

レセプションにおける謝辞

1987年5月10日

神戸市相楽園

ここで、私のささやかな贈物をさし出すまえに、今日、妻と私をあらゆる方法で暖かく歓待して下さっておりますことに、心から感謝の言葉を述べたいと思います。

私の大主教としての前任者であります三人のお方たちが、皆さん神戸に来ていらっしゃいますので、私も神戸に来るまでは、本当のカンタベリー大主教になったという思いがしないと感じておりました。

そしてまた私は、そのお方たちが、皆さんがたと共に過ごされた時のことを、どんなに思い出深いものとして大事になさっているかということも存じております。昨年、九十才後半の高齢でお亡くなりになりましたフィッシャー大主教夫人と、お亡くなりになる直前にお会いしたのでありますが、頭脳ははっきりしておられました。夫人は、ご夫君ジェオフリー・フィッシャー大主教とともに訪問なさったあらゆる土地のことについて語られたのであります。と申しますのも、かの大主教はだいの旅行好きでありましたし、戦争が終わったばかりの時期に、各国を歴訪された偉大な旅行者でありました。まさに平和をつくりだすお方でありました。そして夫人は、日本でお過ごしになった素晴らしい日々のことを、大切に記憶なさっておられました。

私は今朝、この大聖堂に到着いたしましたとき、八代斌助主教記念室で一枚の写真を見せていただきました。私共も、私の前任の方々がそうであったように、皆様がたの心温まる歓迎、しっかり根をおろした信仰、聖堂に溢れる礼拝、こまやかなご親切等々に触れることができた喜びを、生涯決して忘

れることができないでしょう。

ここ神戸での思い出を感謝申し上げます。ここには、私が言葉でお礼を申し上げることができないほどのものが存在しております。と申しますのは、私は英国のリバプールというところから参りましたが、生まれてから最初の二十年間をそこで過ごしたのであります。リバプールは、神戸のような大きな港町でありまして、そのことがまた、今日神戸に来ることができて、私が幸せに感じている理由の一つでもあります。私の母は太平洋航路の汽船でよく旅行したものでありますが、私がまだ幼かった頃、日本に来て神戸をも訪れて、どんなに楽しかったかということ話を話してくれていたからです。

でありますから、今日、皆様がたと共にいて、皆様がたの暖かい友情を経験し得ますことは、私の年来の夢が叶えられたものであるということを、ご理解いただけたと思います。

そして、カンタベリー大主教としての私にとりましては、個人的なことではありますが、前の日本聖公会首座主教であられたテトス中道淑夫主教が列席なさっていることも、私の喜びであります。中道主教は、私のカンタベリー大主教着座式のときに、日本聖公会を代表して参列して下さいました。

世界の各地から聖公会が集まりますときには、常に、日本からの代表が出席しておられます。というのも、日本聖公会は世界の聖公会の仲間に対して、非常に忠実であるからあります。そして、今日、世界中どこでも日本人に出会いますし、カンタベリーにおいてもそうです。私はつねに、カンタベリー大聖堂の会衆の中のどこに日本の方々がおられると指摘することができます。カメラを沢山抱えておられるからです。もちろん、おいで下さることを喜んでおります。日本はいまや、国際的ななかで大きな部分です。皆様がたの教会が小さい教会であっても、世界の聖公会のつながりの中にあって、大きな影響力を有しております。でありますから、ここ神戸にあって、地方教会の生命をしっかりと築き上げていただきたいのであります。それは、偉大なことなのであります。

こんなにも大きな人生の感動と喜びと力を、私にお与え下さいましたことを、心から感謝申し上げます。今朝、八代主教の若いご子息にお会いしたのですが、脈々と続いている偉大な八代家に、教区を通じて今日このような歓迎をして下さいましたご一家に、妻と私からの感謝のしるしをお贈りしたいと思うのであります。

ここに小さな贈物を持参いたしております。皆様がたが、贈物と思ってくださるよう願っておりますが、これは大聖堂へ献呈する私の写真であります。他の大主教方の肖像写真と並べて、大聖堂に懸けて下さることを望みます。

ただいま、心のこもった挨拶を下さいました原清氏（教会代表）、天羽民雄氏（大阪駐在の日本国特命権大使）、マッカーシー氏（大阪駐在の英国総領事）のお三方にもお礼を申し上げます。

さて、この歓迎レセプションの場において、カンタベリー大主教は何の権限もないのは当然であります。この集まりの支配者ではなく、たんなる一来訪者に過ぎません。その私も、『さあ、もうそろそろ乾杯にしましょう』と申し上げることによって、皆様の人気を博することができるであります。

（訳・藤間繁義）